



「読む力」についての一考察(2)

— 「問う力」や「体験」に支えられる「読む力」—

呉大学エクステンションセンター

深川 賢郎

■ 「問う力」と「知識」と「経験」

これまで、現実を「読む力」や作品を「読む力」の重要性とその効用について、事例をもとに考えてきた。そこで、もう一步進めて「読む力」をささえている要素にはどんなものが考えられるか、ということについて考察してみたい。

文章に接する時、表現されている意味を平板にとらえるだけでは、作家の真意は伝わらない場合がある。作家は、表現の背後に深い意味を託していることもあるし、比喩や例えでないと表現できないこともある。表現の文（あや）に託して、初めて言い表せる心情もあるということである。その典型は、俳句や短歌である。散文においても、事実を述べながら背景に多くの内容を託す作家は多い。

「読む力」の要素として考えられることは、一つには「問う力」である。表現されている事柄の持つ背景や深い意味合いをとらえるのは、「考える読み」による。じっくり読むとか熟読するということは、文章に対して質問を発しながら読むことで、安易に文字づらを流し読みしないということである。

「読む力」の要素として考えられる、いま一つは、読み手の「知識」や「経験」である。読み手に豊かな「知識」があると、文章に述べられている事実について、直接表現されていないさまざまな周辺状況を補填して読み取ることができる。「経験」は特に、自分の体験と重ね合わせることで「共感する力」を補足する力を支えてくれる。

これらの要素が「読む力」をどのように支えているか、事例をもとに考えてみたい。

■ 性に目覚める少女

再び向田邦子著『父の詫び状』の中の作品について、「細長い海」の一部を取り上げてみよう。この作品は、邦子が小学校四年生のときの体験を述べている。初夏のころであろうか、海辺の貸し座敷で、家族が食事をし、くつろぎの時間を持ったときのことである¹⁾。

大人にとって景色は目の保養だが、子供にとっては退屈でしかない。小学校四年生の私は一人で靴をはき、おもてへ遊びに出た。貸席と貸席の間はおとな一人がやっと通れるほどの間で建っている。私はそこを歩いてタクシーの通る道路の方を見物にゆき、格別面白いものもないので、また狭いすき間を歩いて家族のいる座敷へもどっていった。

その時、海の方から、一人の漁師が上ってきた。下帯一本の裸で、すき間いっぱいになって歩いてきた。よけようとして板にはりついた時、ふっとお正月のお飾りにつかう「ほんだわら」と同じにおいだと思った。そして、次の瞬間、洋服の上から体をさわられていた。漁師は私に軽いいたずらをしたのである。

ふかがわ けんろう

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学エクステンションセンター

声も出ないで立ちすくんだ時、父の大きな声が聞こえた。漁師はそのまま行ってしまった。

私はしばらくの間、板に寄りかかって立っていた。建物と建物との間にはさまれた細長い海が見えた。

私はすぐには座敷にはもどらず、いったん表へ出て井戸で手を洗った。さびついたポンプが、「ジャッキン・ジャッキン」と音をたてた。ごしごし手を洗ってポケットからハンカチを出して拭いた。

ハンカチの端に、母の字で「向田邦子」と書かれた墨の字が、水をくぐって薄くなっていた。初めて自分の名前を知らされたような、不思議な気持ちがあった。

ゆっくりとハンカチをたたみ、今度はぐるりと廻って座敷へもどった。さっきのことは誰にもいわなかった。

この部分は、何気なく読むと変化の少ない出来事のように読める。しかし、少し目を凝らして読むと、気になる部分がいろいろ出てくる。

たとえば、「私はすぐには座敷にはもどらず、いったん表へ出て井戸で手を洗った」という表現を見ると、なぜ、ここで手を洗ったのだろうか、という疑問がわいてくる。

「初めて自分の名前を知らされたような、不思議な気持ちがあった。」という部分を読むと、十四歳まで、自分の名前と付き合ってきたのに、「初めて…」というの、どういうことだろう、と考えさせられる。このような疑問を抱く要素が随所にあるのである。

そこで、改めて吟味してみたい部分を取り上げてみる。次のような表現はどうであろうか。() 内に疑問点も挙げてみたい。

- ① 「ほんだわら」と同じにおいだと思った。(漁師との距離はどんな状況なのか)
- ② 漁師は私に軽いいたずらをしたのである。(何があったのか、どんないたずらなのか)
- ③ 私はしばらくの間、板に寄りかかって立っていた。建物と建物との間にはさまれた細長い海が見えた。(心理状態は、どのようなものであったのか。海が見えたというのはどうして印象深く残ったのか)
- ④ いったん表へ出て井戸で手を洗った。(手を洗うことに何の意味があるか)
- ⑤ ハンカチの端に、母の字で「向田邦子」と書かれた墨の字が、水をくぐって薄くなっていた。初めて自分の名前を知らされたような、不思議な気持ちがあった。(どのような心理状態なのか。初めて自分の名を知らされたというの、何を意味しているのか)
- ⑥ 今度はぐるりと廻って座敷へもどった。(なぜ、まっすぐに座敷へ帰らないのか)
- ⑦ さっきのことは誰にもいわなかった。(大きな衝撃だったのにどうしていわないのか)

これらの部分について、考えられることを吟味してみよう。別の視点から読むと、あるいは深読みしすぎだと思える部分もあるだろう。ここでは、一つの試案として、私なりの解釈を提案してみたい。

- ① 漁師の体臭が「ほんだわら」の匂いだったことは、漁師と邦子との間隔がきわめて近く、ほとんど邦子の顔と漁師の体とが接するくらいであったと考えてよいだろう。そのにおいては漁師の身体にある汐の匂いだったのではないか。異性としては、父親と弟しか知らない邦子にとって、「下帯一本の裸」の男性(多分若者であろう)が、それほど身近に擦り寄ってくる体験は、大きな驚きであったに違いない。
- ② 邦子が漁師によって、洋服の上から「触られた」場面である。当時(戦後)の小学校の四年生といえば、今の子どもほど性の知識も多くはなく、まだ幼いものだったのであろう。漁師は幼い少女にそれほど露骨な振る舞いはしなかったのかもしれない。「軽いいたずら」とある。しかし、邦子にとって「軽いいたずら」は晴天の霹靂であった。異性から、洋服をへだてているとはいえ、身体に触れられることは、体験したことのないものだった。少女の直感で気付いたものは何だったのであろうか。誰からも教わったことのない、不可思議で、神秘で、底知れない深遠にあるもの、それは「性の覚醒」だったのではないか。
- ③ それであるがゆえに、いま流行のことばでいうと「頭の中が真っ白」になって、声を立てることも

ならず、身動きもできない衝撃が走ったのである。あたりのものが見えなくなり、ただ、建物の間から見える、遠くの「狭い海」が脳裏に焼きついた。トンネル現象として強烈に焼きついた。追い詰められた強い緊張感が海の風景に投影したと思われる。

- ④ 手を洗う行為は何を意味するのか。裸の漁師に手が触れたのではない。少女が無意識に受けた、このころの「処女性の汚染」に対する「禊(みそぎ)」である。家族の前に戻るには、身を清めなければならない。邦子は、誰に教わったのでもないこの営みを実行した。人は、成長と経験から、自分の中にあるDNAによって太古から受け継がれている性と出会い、異性の存在を容認していく。「井戸で手を洗った」という行為は、処女性の維持・回復を求める儀式だったのではないだろうか。
- ⑤ ハンカチに「向田邦子」という薄れかけた文字を発見したのは、大人としての女の目覚めを象徴していると読める。「初めて自分の名前を知らされたような、不思議な気持ちがあった。」という表現が、邦子の新しい自覚(大人としての自己との対面)を裏付けている。邦子は、このとき精神的に大人の女性の仲間入りをした。
- ⑥ 漁師とすれ違った建物のすき間を、もう一度通ることは、はばかれた。いたずらをされた現場が近寄りたがたいものだったのではないだろうか。異性にいたずらされた体験は、それほど衝撃的だったのである。そのうえ、性に目覚めたという新しい自分発見の現場でもあった。深い意味を持つ体験の現場を無意識に忌避したのである。
- ⑦ こんな「体験」は、子どもでない限り、家族の前に報告しない。性に対する無意識の羞恥心から、自らの体験をあからさまにすることを拒み、内に向けてこもっていく少女の姿がみえてくる。著者は、この部分について、作品の中で次のように述べている。

「漁師は若かったのか年かきだったのかも覚えていない。なぜ声を立てなかったのか、手が汚れたわけでもないのになぜ手を洗ったのか。どういう気持ちだったのか。分かるような気もするが、言葉にしてならべると、こしらえごとになりそうなのでやめておいたほうが無難だろう。」

著者は、「性に目覚めたとき」の出来事を紹介し、そのとき自分はどのような行動をたどったのか、事実をていねいに述べている。解釈を読者に委ねているのである。読者がうっかりしていたら、「少女が軽いいたずらをされて、手を洗って家族のところへ帰っていった。」と読んでしまうだろう。これでは、作者の意図、すなわち少女の大事件を読み取ったことにならない。

■ 父親の真意はどこに

向田邦子著『父の詫び状』の中の作品「ねずみ花火」には、三つの話題が取り上げられている。その一つに邦子の父親の実像らしきものが読み取れる部分²⁾があるので、それを取り上げて考えてみたい。

邦子の弟の同級生に富迫君という小学校二年生の少年がいた。これが実名かどうかはわからない。鹿児島にいたころのことである。弟は富迫君と親しかった。

富迫君は父親がなく、母親と二人暮らしだった。ゆとりのない暮らしとみえて、身なりもみすぼらしかった。

父は富迫君をかわいがった。身勝手な人間で、自分の仕事関係の客は無理をしてでももてなすが、子供のともだちなどうるさかった人だが、富迫君だけは別だった。父は、父親を知らない自分を、親戚から村八分にあいながら、母親の質仕事で大きくなった惨めな自分の少年時代を彼の上に重ねて見たのだろう。

汗ばむ季節だったから、初夏だったのか夏のおわりだったのか、日曜日の日を私と弟を連れて吹上浜というところで遊んだ。富迫君も一緒だった。富迫君は、黒っぽい風呂敷に弁当を入れて斜めに背負ってついてきた。おひるにあけたのを見ると、自分の頭より大きい海苔を巻いた握り飯だった。父はその握り飯を自分で食べ、富迫君にはうちから持ってきた海苔巻きを食べさせた。水筒に入った

甘い紅茶を自分でついでやっていた。(略)

お弁当をすませた弟と富迫君は相撲をとっていたが、組み合ったまま、ゆるやかな砂の斜面をごろごろと下へ転げ落ちた。落ちたところで、なおもふざけながら坊主頭をはらいあつては笑いあつている。

父も笑いながら見ていたが、不意にハンカチを出すと眼鏡の曇りを拭きはじめた。父は泣いているようだった。

この部分は私にとって印象的だった。平素は、威張り散らしている父親が、富迫君の笑っている姿を見て、涙を流したというのである。私にこのような体験があるというのではない。楽しいピクニックで子どもたちがふざけあつて遊んでいる姿に涙することは、尋常ではない。この父親の姿に何を読み取るか、ということは大きな問題であろう。結論から言うと、邦子の父親、敏雄には、自分の少年時代が、富迫君の境遇に重なって見えたのである。虚弱な体格、食べるものも人並みには与えられていない。まして、富迫君は甘い紅茶など飲んだことはないであろう。富迫君の姿に、なにくれとなく不遇な生活が見えてくる。それが父親、敏雄の少年時代と重なってグングン迫ってくる。富迫君の後ろに彼の母親の姿も浮かんでくる。それは、父、敏雄の母の姿と重なりあつていたのである。

一方で、富迫君は、向田家の子どもと分け隔てなく楽しんでいる。その無心な美しさに父、敏雄はいつそう不憫なものを感じたに違いない。

■ 扇谷正造の誤読

このようなことを、あれこれ頭に描いて別の本を読んでいたら、次のような文章に出くわした。『新・平家物語』を執筆中の吉川英治のことについて、扇谷正造が見聞した事柄である。その部分³⁾を紹介し、『父の詫び状』と重ねて読んで見ることにしよう。

『新・平家』取材旅行で、昭和二十六年か七年、(吉川)先生は(略)新潟の宿屋で、あんまさんと呼んだ。少年あんまだった。すると、先生は、三千円のチップをはずまれた。当時にしても、五百円くらいでもあったろう。それを三千円とは！ 私は、いささかの抵抗を感じ、流行作家の、一側面を見せつけられた思いがした。率直にいつて私は不愉快だった。

……ずっとあとになって『忘れ残りの記』を読みかえしているうち、ふと、先生が、少年のころ、ひるは奉公し、夜は流しのあんまをしていたのを見た。吉川少年が、夜ふけに笛を吹いて街を流している。呼びとめられてあがる。肩をもむ。ふと客と目を合わせる。

「おお、英ちゃんではないか」

客は、全盛時代の父の友達であった。英治少年は、はだしになって、庭に飛び降りて、逃げる……。

(ああ、そうだったのか。あの時の三千円は、ああ、そうだったのか。新潟の少年あんまに、先生は何十年か前の先生自身を見た……先生、ごめんなさい。先生……。)

少年に三千円のチップをはずんだ吉川英治の真意を、そのときの扇谷正造は理解することができなかった。それは、吉川英治の過去の深淵に息づいている苦い体験によつたものであり、その事情を知らない余人の推察できることではなかった。父親が全盛時代に、英治少年はこの「おじさん」に出会っている。そして今は、落ちぶれて、その日その日の生活を支えるために、働いている。働くことが恥ずかしいのではない。父のかつての友人から、恩恵を受け、同情されることがたまらないのである。

あんまの少年に出会ったとき、吉川英治は自分の過去の姿をその少年に見た。いや、はだしで庭に走り出した時の強烈な屈辱もよみがえった。悲惨な自分の過去を振り返ったとき、この少年の日常も推し量られた。それはもはや他人のことではない。破格の「三千円」になにほどの躊躇がいろいろか。しかし、このことを知っていたのは、吉川英治一人だけだったのである。

扇谷正造が「三千元」の意味を理解するためには、『忘れ残りの記』に述べられている吉川英治の「体験」を知らなければならなかった。この体験を知らないままであったら、扇谷正造の中に、ときめいていた吉川英治の「驕り」の姿が滓（おり）のように沈んでいたであろう。吉川英治に深い尊敬の念をいだきながら、心の片隅に、吉川英治の「驕り」を一点の曇りとして、生涯抱いていたにちがいない。幸いにも扇谷正造は『忘れ残りの記』を読み、吉川英治の体験を「知識」として得ることができた。その結果、自分の浅はかな判断と、その反省が扇谷正造のなかに、「……先生、ごめんなさい。先生……。」という心の叫びとしてわいてきた。この「……」の部分は、強く自分を攻める言葉を扇谷正造が、自ら飲み込んで、ぎりぎりのお詫びと告白をしている部分である。

吉川英治と向田邦子の父、敏雄に通じるものがこの二つのエピソードには流れている。

向田邦子の見た、富迫君について、父の涙の真意を知ることには容易ではない。父親の、自分だけが知っている深いわけがあったかもしれない。しかし、吉川英治の体験を重ねて読むと、背景が見えてくる。生活苦の中でがんばっている富迫君に対する敏雄のまなざしは、限りない同情と優しさに満ちている。父は富迫君のなかに自分の少年時代を見たのである。もっと大胆にいわせてもらえば、富迫君のお母さんをも見たであろう。父、敏雄の母も細腕一本で敏雄を育てた。貧しい生活でありながら、吾が子のために律儀にがんばってくれた。富迫君のお母さんも、吾が子の喜ぶ姿を心に描いて、ピクニックに出してくれた。スマートではないが、頭ほどの大きなおにぎりを持たせた。それは、貧しい母親のわが子を思う最大限の愛情表現なのである。父、敏雄の母も同じような母だった。著者の向田邦子は、「不意にハンカチを出すと眼鏡の曇りを拭きはじめた。」という事実のみでこの部分を述べた。

私たち読者は、作品に示されている事柄を手がかりに読み込んでいくのであるが、時には、著者や登場人物の知られざる側面を知識として補う必要がある。文芸評論家の資料や著者の他の作品にそのヒントがある場合もある。

納得のいく、豊かな読みをすすめるために必要なことは、一つには、「問う力」であり、いま一つは、表現されている事実について、読み手がどのような体験や知識を持っているかということであろう。体験や知識が血の通ったものであれば、それは、裾野の広い解釈をもたらし、心に響く確かな読みを提供してくれるにちがいない。

文 献

- 1) 向田邦子著『父の詫び状』文芸春秋文庫 1981年版 pp.80-81
- 2) 向田邦子著『父の詫び状』文芸春秋文庫 1981年版 pp.129-130
- 3) 扇谷正造著『吉川英治氏に教わったこと』六興出版 1972 pp.9-10